

ジャン＝レオン・ジェロームによる彩色彫刻《タナグラ》  
——制作動機の再検討と作品の位置付け——

藤沢知綾（成城大学）

ジャン＝レオン・ジェローム（1824-1904）は、19世紀フランスにおいて活躍したアカデミズムの画家として知られる。古典古代や東方を題材とする絵画によって既に名声を得ていたが、1878年のパリ万国博覧会では彫刻家としてもデビューを果たした。1890年のサロンに出品した《タナグラ》（パリ、オルセー美術館蔵）は、彼が初めて手掛けた彩色彫刻である。本作は、ほぼ等身大の裸体女性が台座に深く腰掛けた白大理石の座像で、左掌にはフープを回す小さな女性小像を載せている。

先行研究において、本作の制作は1873年における古代ギリシアの彩色小像、いわゆるタナグラ人形の発掘が契機となったとされてきた。本作の台座には「タナグラ T A N A Γ P A」と刻銘されておりタナグラ人形との繋がりには明らかであるが、制作年代は発掘から17年が経過しているため決定的な動機としては説得力に欠ける。ジェロームの彫刻作品に関する先行研究のほとんどが、彼の彫刻全体を扱うものであり、個別作品に焦点が当てられてきたわけではない。しかし、《タナグラ》以降、ジェロームは彩色彫刻を精力的に制作していくことから、本作はいわば分水嶺となる作品である。したがって、本発表では《タナグラ》を取り上げ、彼の彫刻制作、ひいては19世紀後半の彫刻における本作の位置付けを試みる。

はじめに、《タナグラ》制作前後のジェロームの動向や言説をもとに、本作の制作動機を再検討する。彩色彫刻に適した大理石探索のほか、特に、友人であったトルコ出身のオスマン・ハムディ・ベイ（1842-1910）が古代の彩色された石棺を1887年に発掘したことに着目し、その発見が作品制作に及ぼした影響について考察する。また、ジェロームは友人らに宛てた手紙の中で石棺の彩色への関心ばかりでなく、《タナグラ》に言及しつつ古代の彩色彫刻の復活の意気込みや、彩色は彫刻に命を吹き込む行為であると述べている。

くわえて、彼の時代の彫刻作品に対する同時代の評価にも着目する。当時のアカデミーの彫刻は、過度な形式化やバラエティーの欠如、複数性の問題といった否定的な評価がなされ、衰退傾向にあった。《タナグラ》はそのような状況下で制作された。本作の直後には、まさしく彫刻に命が吹き込まれる神話主題を扱った絵画《ピュグマリオンとガラテア》（ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵）を描いており、そのような主題の選択と《タナグラ》制作には関連が見られる。

以上から、ジェロームは白大理石の彩色彫刻《タナグラ》を制作することによって、古代の彩色彫刻を復活させ、さらには当時のアカデミーにおける彫刻を活性化させようと試みたと結論付けられる。